「男の浪漫」で妻に　叱られたこと

土居　修

卒業式を3週間後に控えた2月初旬の夕刻。鍋焼きラーメンを食おうという話がまとまり、ひさしぶりに谷口食堂の暖簾をくぐった。

剣道部の4人と柔道部の2人、そしてなぜか野球部で主将を務めた男がいた。私たち6人には青春と武道という関係性があったが、彼とはそれがない。不可解な交友であったが、ともかく、7人でホーロー鍋の中で煮えたぎる細麺をすすりながら3年間の尽きることのない思い出を語り合った。

豊饒な時間が流れていった。愉快な男たちである。私はホーロー鍋を傾け、わずかに残ったスープをレンゲでゆっくりと飲み干した。そして、一切れの沢庵を感慨深く箸でつまみあげ、言った。

「盟約を結ぼうよ」

青春は美しい季節であった。だからこそ、その形見を残しておきたいという思い。それが、盟約であった。

今回はその盟約で妻に叱られた顛末を記す。だが、これだけは特筆しておきたい。

「男の浪漫」を斟酌できなかった妻に責任のすべてがあるということを。

最も早く結婚したのは、剣道部のT。某支援学校勤務時代に教育実習生を毒牙にかけている。彼女との年齢差は4歳であった。

Tに続いたのは、野球部のH。デートのために往復8時間をかける彼を、当時の私たちは哀れと冷笑していた。若さは時に残酷にもなると今振り返って思う。憐れぬいて、華燭の典を挙げるに至った。

それからすぐに剣道部のKが結婚した。婚約していた妻と披露宴に出席した記憶も懐かしい。Tと同じ某支援学校の教員で、ある研修会で知りあった5歳年下の彼女に惚れられたという。媒酌人がしつこいほどに繰り返していた光景が思い出される。

4番目が柔道部の私。年齢差は6歳。惚れられたから、結婚したのである。29歳の冬の献身であった。

披露宴の翌朝、二日酔いの微睡みの中で私は「勝った」と叫び、克明に盟約の全容を紐解いた。

妻の表情が徐々に険しくなっていくのがわかった。木で鼻を括り始めていると察知した。

「バカじゃないの」

案の定、叱られた。

「どうしてよ。男の浪漫なのに」

「くだらない浪漫ね。男って、ほんとうにレベルの低い生き物ね」

以来、妻に対して「男の浪漫」ということばを封印して生きてきた。「男の美学は」と語ることだけがささやかな抵抗となっている。

結婚を素材にして優劣を競おうと結んだ盟約。優劣とはこの場合、伴侶との年齢差を指す。それが最も大きければ勝利ということであった。ただし、相手から惚れられなければならないという条件がついている。6番目に結婚した剣道部のAの発案であった。いいじゃないかと最初にうなずいたのはK。みんなが彼に倣った。

決して女性に対する侮蔑ではなかった。あの日の私たちにとって、女性はドイツの哲学者のルドルフ・オットーのいう「メミノーゼ」（道徳や習俗、認識とは別途の、ただ神聖な存在）であったのだから。

私に続いたのは剣道部のS。背が高く、容姿にどことなく気品を漂わせていたが、剽軽でもあった。惚れられたのよと披露宴の席上で胸を張っていた。年齢差は一歳。

盟約に条件をつけようといったAがその後に結婚している。相手は剣道部のはるか先輩、年齢差は6歳であった。交際していることを知った私たちは執拗に彼を諌めた。

「やめちょけ。おまえには決して合わないから」

しかし、彼は立ち止まらなかった。「惚れられる」という条件を提案したことを忘れている彼を見るのは無性に辛かった。

Sの披露宴で柔道部のIに酒を勧めながら、私は勝利に酔っていた。未婚の彼が私の脅威になるはずはなかった。

「豪勢な一泊旅行に行けるよ」

その翌朝、誇らしげに妻に告げた。

「あら、そう。よかったじゃない」

素っ気ない返事。妻は3年の歳月をかけてなおも叱り続けていると悟った。悲しかった。

「けど、Iさんはどうなの」

「あいつは独身主義者じゃないかなあ」

「そんなふうにはみえないのに」

そのIが気楽な独身生活に終止符を打ったのは、Sに遅れること2年。将棋の駒をひっくり返したような顔で、美辞麗句を並べ立てて口説きおとしたであろうことは容易に想像できた。そのことに腹も立ったが、年齢差が8歳という事実にも憤慨した。

しばらくしてAと杯を傾けたとき、「あの盟約を覚えているか」と問うてみた。

「忘れたわけではないけど」

「けど、なんだよ」

私は意地悪く、突っ込んだ。

「俺が結婚したとき、勝つ見込みがなくなったから忘れることにしたんだ」

「そうか、俺もIと引き分けた日から、なかったことにしている」

私が完全勝利を果たせなかったという衝撃をもって盟約を反古にした遠い記憶。低俗と妻に叱られたこともあったが、今も目を閉じれば谷口食堂のあの日が懐かしく浮かんでくる。

余談。20年前にSが逝き、3年前にHが旅立った。KとSも離婚し、谷口食堂も一九80年に閉店している。遠く去っていった青春にもはや呼びかける言葉はない。ただ、せつないのである。

須崎名物
鍋焼きラーメン
始まりは谷口食堂
須崎高校生（の一部）がよく通った店

めだかの学校は川の中

谷内純一

私は親からあまり躾というものをうけていません。

追手前高校で私は陸上部顧問でした。「県体」陸上の200m決勝で三年生がスパイクで怪我を負ったことがありました。ご家庭には平田病院に運びますと連絡しました。病院の処置室には私と二年生の陸上部の生徒二名が入り口近くの椅子に控えていました。

怪我した生徒の母親がガラス戸をあけて入って来ましたが、私たちの方をちらっと見て、すぐに手術台の上の息子の方に向かって歩きながら「あーら、レイちゃん、どうしたの」と声を掛けました。すると、私の横の二年生の一人が「僕はあのお母さんの態度が気にいらないなあ。」とささやきました。するともう一人も「僕も気に入らない。」と応じました。はじめの生徒が「あのお母さんほまず谷内先生に向かって『お世話になっています。』と言ってから先輩のところへ行くべきだと思う。」と言うと、もうひとりも「僕もそう思う。」と言ったのです。私はそんなことはちっとも思ってなかったので、生徒から礼儀作法を教えられた気がしたことでした。

二年生の子たちは別の話をしはじめました。「僕は陸上部に入った一年生の時、今は大学生になっている秦泉寺先輩からあるとき『お前の谷内先生に対する言葉遣いはいったい何なんだ。』と詰め寄られて震え上がったことがあったよ。・・・」

私は生徒たちから学びましたね。そして生徒たちの間の教育力のつよさというものを思いました。生徒が教師から指導をうけたとしても震え上がるということは有りません。

メダカの学校は川の中
だれが生徒か先生か
みんなでお遊戯しているよ

を思い出します。

この話は後日談があります。私の母校城山高校が数年前に七〇周年記念行事を行い、祝賀会がありました。母校の校長になっているのは追手前高校での卒業生であの陸上部の生徒たちと同じころの教え子でした。私は校長にあの追手前高校陸上部のエピソードをはなしました。そして「あのときは、生徒たちから教えられたけど、こんなにも思いましたよ。あのお母さんが教師に挨拶もせずに我が子の方へむかったのはきわめて自然な親子の情であって、それでいいんだ。こんな際、礼儀作法なんか問題ではないとも思いましたね。菜根譚には『あんまり礼儀作法にこだわらない方がいい』とも書いてあるけれど。」と言いますと、校長は「いや、それは谷内先生のお人柄で、谷内先生がもしも『あのお母さんは自分のところへ挨拶に来ない変な人だ』と思うようなら、僕はそのほうをかえって残念に思いますね。」と言いました、また教え子から教えられました。

編集部より

谷内さんから上記投稿のほかにもうひとつ原稿をいただいています（次回に掲載します）。その原稿に次のような伝言が添えられていました。

「できれば『メダカの学校』から掲載していただければありがたいです。理由は『谷内の文たいしたことない。こんなのだったら自分も出してみようか。』と高退協の仲間が思ってくれたらいいと思うからです。」

谷内さんは「たくさんのひとが書いてくれたらいい」といつも言っています。高退協ニュース編集部からも多くの方に投稿していただくことを願っています。『文字でつながる交流の場・高退協ニュース』に気楽に投稿してください。

〒780-0850
高知市丸ノ内2丁目1～10
高知城ホール高教組気付
高退協　ニュース担当係

高退協第178回読書会

8月27日（木）14時～　　於ムトー荘 205号室

テキストは『アメリカの制裁外交』

杉田弘毅著　岩波新書

参加費500円（会場使用料）

参加希望者は直接お越し下さるか樋口勇雄さんまで